

61 『今昔物語集』の中の身体に関わる
表現 (二)

計 良 吉 則

順天堂大学医学部医史学研究室

『今昔物語集』は平安時代末期に成立した説話集であり、天竺(インド)、震旦(中国)、本朝(日本)の三国にわたる仏教説話・世俗説話一千数十を三十一卷(三卷欠)に収めたものである。その中には高僧から一庶民まであらゆる階層の人々が登場し、生き生きと行動する話が数多く存在する。

『今昔物語集』の中で今回は、本朝世俗説話(巻第二十二~三十一)において、身体に関わる表現に着目し考察した。そのことは当時の身体観を知るうえで意味があると考へる。

また、巻第二十四には、知的技芸譚の一領域として、医師や医術にまつわる説話がみられて興味深い。

初めに、身体の動作や状態を示す表現に関して。巻第二十二についてみると、「参る」「蹴る」「立つ」「走る」などの体の移動や運動に関するものが圧倒的に多いのが特徴である。第一に「殊二内ニ参ル事無シ」、「御子ノ鞠蹴給ケル御沓ノ御足ニ離テ上ケルヲ」や「顔ヲ赤メテ立セ給ルヲ」、「大織冠自ラ大刀ヲ拔テ、走り寄テ」とある。

感情・精神作用に関するものが比較的多くみられ、第一に「難有ク喜キ志也」、「大臣此レヲ聞テ、驚キ泣キ悲ムデ」がみられ、第四に「万ノ人此レヲ見テ恐怖レテ」がみられる。

存在を表すものも比較的多く、第二に「淡海公ト申ス大臣御ケリ」、「太郎ノ大臣ハ祖ノ御家ヨリハ南二住シ給ケレバ」とある。

老若に関するものは第一に「蝦夷年来公ニ仕リテ老ニ臨ケルハ」、第三に「其ノ大納言八年若シテ」とある。

病的状態や死に関する表現は、第一に「大臣身二病ヲ受ケ給ヘリ」、「家ノ内ニシテ家ト共ニ焼ケ死ヌ」、

「天皇程無ク失サセ給ヌレバ」とある。

生命の誕生に関するものは、第一に「其ノ後、亦、大臣ノ御子ヲ産メリ」、第七に「男子二人打次テ産テケリ」とある。

婚姻や契りに関するものは、第七に「恋シク思エ給ヒケレバ、妻ヲモ儲ケ不給ザリケル程ニ」、第八に「何ナル人此ル人ニ副テ有ラム」とある。

容貌などに対する美的表現は、第八に「北ノ方ハ僅ニ二十ニ余ル程ニテ、形チ端正ニシテ」や「伯父ノ大納言ノ北ノ方美麗ナル由ヲ聞給テ」がみられる。

体の清潔に関するものは数少なかった。

次に、身体の部分や分泌物を表現したものに關して。卷第二十三についてみると、多くみられるのが「身」で、第十五に「身ノ力ナドゾ極テ強カリケル」、第二十一に「身碎ケテ可起上モ非ズ成ヌ」などとある。

四肢に關するものも多く、第十五に「脇ヲ搔キ指ヲ差テ」や「片膝ヲ突テ、太刀ノ柄ニ手ヲ懸テ居タリ」とある。

胸や腹などの体幹に關するものもみられ、第二十五

に「恒世ガ胸ヲ差テ只絡ニ絡バ」とあり、第十五に「腹ヲ合セテ走り当リヌ」とある。

頭、頸などの頭頸部に關するものもみられ、第十五に「太刀ヲ抜テ打ケレバ、頭ヲ中ヨリ打破ツレバ」、「シヤ頸取ラント思給テ候フ也」とある。

また、五孔を表すものがみられ、第十五に「鼻下リテ赤髮也」、「目ハ摺赤メタルニヤ有ラム」とある。

分泌物に關するものでは第二十一に「成村築垣ノ内ニ越立テ足ヲ見ケレバ、血走テ不止ニ」がみられた。

医師や医術にまつわる説話もいくつかおさめられていた。名医である典葉頭が寄生虫（さなだ虫）を治療したり、化膿巢を治療したりした様子が記されている。また医師が毒蛇で死にかけた女を妙薬の力で治療した話や、医術に長けた丹波忠明が、雷の感電でシヨック状態の男を救った話が載せられている。